

「終わりに近づくときのしるし (3)」

マルコの福音書 13:21~37

はじめに

神のご命令、それは私たち人のそれとは大きく異なり、何ものも逆らうことのできない、絶対的なものです。もしこれに逆らい、拒絶し、無効にすることができるものがいたとしたら、たとえ神がその権威によって「燃える火の池に行きなさい」もしくは「おまえはゲヘナに行くことになっている」そして「その苦しみの中で永遠にとどまっていなさい」とお命じになったところで、そのものは決して従いはしないでしょう。ですから神のご命令とは、神のご計画、定めとも言い換えられる、絶対的かつ決定的なものです。そしてそれらは予め聖書に記されており、筆者である神ご自身でさえも、もはや否定はもちろん変更すること、補足することさえ呪いによって禁じられており（黙示録 22:18~19）、一切不可となっています。つまり聖書に記された神のご命令、そこに表されたご計画は、神と同等かそれ以上の絶対性を有しているということです。ですから神のご命令は、人のそれとはまったく次元が違うということ、人の概念やイメージで神のご命令を、神のご計画を捉えないようにと心からお勧めします。

1. 偽キリストたち、偽預言者たち

マルコの福音書【新改訳 2017】

13:21 そのときに、だれかが、『ご覧なさい。ここにキリストがいる』とか、『あそこにいる』とか言っても、信じてはいけません。

13:22 偽キリストたち、偽預言者たちが現れて、できれば選ばれた者たちを惑わそうと、しるしや不思議を行います。

13:23 あなたがたは、気をつけていなさい。わたしは、すべてのことを前もって話しました。

13:24 しかしその日、これらの苦難に続いて、太陽は暗くなり、月は光を放たなくなり、

13:25 星は天から落ち、天にあるもろもろの力は揺り動かされます。

今日のイエシュアの御言葉も前回、前々回と同様に 13:4「宮に向かって」語られているということを見え、これを重視しつつ読み解いていきたいと思えます。ですから「**ご覧なさい。ここにキリストがいる…あそこにいる**」というイエシュアのこの御言葉もまた、エルサレムの神殿を指してのことであり、それは先の 13:14 で言われた「『荒らす忌まわしいもの』が、立ってはならない所に立っているのを見たら」という御言葉とのパラレリズム、言い換えによる強調表現でもあると考えられます。この「荒らす忌まわしいもの」が、ここではもっと分かりやすく「**偽キリストたち、偽預言者たち**」と言い換えられています。この「**偽キリストたち、偽預言者たち**」の目的は、本物のメシアであるイエシュアではなく、偽物、偽りのメシアをイスラエルの民、ユダヤ人たちに信じこませることです。そして「**できれば選ばれた者たちを惑わそうと**」もします。つまり真のメシアであるイエシュア、イエス・キリストを信じる私たち教会さえも惑わそうとするのです。そこでイエシュアはこう命じておられます。「**信じてはいけません**」また「**気をつけていなさい**」と。最初に述べたように、神のご命令は絶対です。このご命令、神のご計画によって私たちがこれに惑わされる、騙されるということはありません。そもそも「**わたしは、すべてのことを前もって話しました**」とあるように、惑わす者、騙す者のその手口がここに記されており、私たちは今、と

もにこれを読み、もうすでに知っているのです。タネの分かっている手品を見て誰が驚くでしょう。確かに今私たちがこのイエシュアを信じる教会として、この御言葉を聞き、これを「よく理解する読者」（マルコ 13:14）であるなら、決して惑わされることはありません。

しかしイエシュアをメシアとして認めない、受け入れない、その御言葉を聞かないユダヤ人たちは別です。彼らは真のメシアであるイエシュアを知らないために、この「荒らす忌まわしいもの」、「偽キリストたち、偽預言者たち」によって惑わされ、騙され、これに聞き従い、その支配を受け入れるようになります。しかしそれはただの支配、統治などではなく、かつてナチス・ドイツが行った「ホロコースト（全焼のいけにえという意味）」政策よりもはるかに徹底した「神が創造された被造世界のはじめから今に至るまでなかったような、また、今後も決してないような苦難（マルコ 13:19）」としてのユダヤ人絶滅計画の実行です。

イエシュアはここで「太陽は暗くなり、月は光を放たなくなり」と言っておられますが、これは「偽キリストたち、偽預言者たち」が「荒らす忌まわしいもの」としてのその本性を表し、悪魔のような殺戮者へと変貌していく様子をたとえたものだと考えられます。またあるいは、ユダヤ人たちの信仰のよりどころ、まさに太陽や月の光のような存在である「宮」エルサレム神殿が、偶像によって汚され、荒らされ、その光としての機能を失うことをたとえているとも考えられます。ですから続く「星は天から落ち」という御言葉もまた、地上における神の住まいである「天」の型である「宮」エルサレムの神殿において、そこに仕えるユダヤ人の祭司たちが墮落し、あるいは殺され、あるいは逃げ出さなければならない状態に陥ることがたとえられたものだと考えられます。

もちろんこれらの御言葉を、文字通りの意味としても捉えることもできると思いますが、日食や月食のような太陽と月の異常現象は、毎年のように起こっており、流星や隕石落下にいたっては、ほぼ毎日のように観測されており、これをしるしと捉えることには疑問を感じます。「終わりに近づくときのしるし」が、もし文字通りの日食や月食のようなものとしたら、これまで何度も確認されている自然現象としてのそれと、どうやって見分けるのでしょうか。一体どれだけの数の流星、どの程度の大きさの隕石でそれだと分かるのでしょうか。イエシュアは、神はそんな曖昧なしるしを私たちに提示しておられるのでしょうか。そもそもしるしとは、それがしるしだと誰の目にもはっきりと分かるから、分かりやすいからこそしるしと言えるのです。

何度もお伝えしているように、イエシュアは「宮に向かって」、エルサレムの神殿を指してこれらのことを語っておられるのです。そして同じ出来事を、パラレリズムによって言葉や表現を換えて繰り返し、強調されているという事実からも、この天体の事象についての御言葉もまた同様であると考えられます。すなわち「荒らす忌まわしいもの」、「偽キリストたち、偽預言者たち」、獣とも呼ばれる反キリストが、やがて再建されるであろうエルサレムの神殿をユダヤ人たちから奪い、自分を拝ませる場所、背教の場所へと変えてしまうことが「終わりに近づくときのしるし」として起こることです。しかし、しるしはこれだけではありません。もう一つのしるしがあります。それが次に示されています。

2. イスラエルの夏

マルコの福音書【新改訳 2017】

13:26 そのとき人々は、人の子が雲のうちに、偉大な力と栄光とともに来るのを見ます。

13:27 そのとき、人の子は御使いたちを遣わし、地の果てから天の果てまで、選ばれた者たちを四方から集めます。

「終わりに近づくときのしるし」、その二つ目は「人の子が雲のうちに、偉大な力と栄光とともに来る」という、イエシュアの空中再臨による教会の携挙です。「そのとき、人の子は御使いたちを遣わし、地の果てから天の果てまで、選ばれた者たちを四方から集めます。」私たち教会にとっての、待ちに待った歓喜の瞬間です。この携挙のために、私たちが動く必要はありません。世界中のどこにいても、イエシュアに遣わされた御使いたちによって集められます。イエシュアがおられる雲の中に、空中に集められます。

I テサロニケ人への手紙【新改訳 2017】

4:16 すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、

4:17 それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。

ですから私たちはこの携挙に対し、自分が置かれているその場所で、ただ待っていればそれで良いのです。そしてその時期について、イエシュアは興味深いたとえをもってこれを示しておられます。

マルコの福音書【新改訳 2017】

13:28 いちじくの木から教訓を学びなさい。枝が柔らかくなって葉が出て来ると、夏が近いことが分かります。

「いちじく」は、イスラエルの代表的、象徴的な植物であり、イエシュアもたびたびこれをユダヤ人たちにたとえて話しておられます。ですから「いちじくの木から教訓を学びなさい」とは、イスラエルの時、季節、彼らの持つ暦から学び取りなさい、と語っておられると考えられます。そしてそれは「夏」の時期を指しており、これら二つの「終わりに近づくときのしるし」が、「夏」の季節と関係があることを暗示していると考えられます。前回取り上げたマルコ 13:18「このことが冬に起こらないように祈りなさい」という御言葉もこれと結びついており、夏の時期が指し示されています。なぜならイスラエルの夏とその終わりには、二つの祭りがあり、それらがいずれもこの「終わりに近づくときのしるし」をまさに象徴するかのようなものだからです。それはユダヤ暦の第五の月（7～8月）の9日に行われる「**神殿崩壊日**」と、そして同じく第七の月（9～10月）の1日にある「**ラッパの祭り**」です。

① 神殿崩壊日

「**神殿崩壊日**」は、喜び、祝いの祭りではなく悲しみ、嘆きの祭りです。それはⅡ列王記 25:8～9、エレミヤ書 52:12～13 に起源をもつ、ダビデの子ソロモン王によって建てられた、通称「第一神殿」が B.C586 年のこの日にバビロンによって破壊されたことを覚える日です。しかもその 70 年後にダビデの子孫ゼルバベルによって再建される「第二神殿」、イエシュアが弟子たちとともにご覧になり、そしてその崩壊を預言されたこの宮もまた A.D70 年のこの同じ日に、ローマによって破壊されたと言われている

す。第一、第二の神殿がともにこの「神殿崩壊日」に破壊されたのならば、やがて建てられる第三の神殿、「荒らす忌まわしいもの」が立つことになるその宮もまた、この同じ日に奪われ、汚され、その輝きを、その機能を失うという意味での破壊、崩壊が起こることが十分に予想できます。

②ラッパの祭り

また「**ラッパの祭り**」について。これはレビ記 23:24、民数記 29:1 に定められた祭りで、角笛が吹き鳴らされ、イスラエルのすべての民が集まり、聖なる会合を開くことを、神がお命じになった祭りです。イエシュアの空中再臨による教会の携挙は「**号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られ（Iテサロニケ 4:16）**」で起こる出来事です。またこの祭りは今日、ユダヤ人たちにとっての元旦「新年の祭り」としても定められており、新しい年、新しい時代の始まりを指し示す祭りでもあるのです。イエシュアがこの後の箇所で「**13:30…これらのことがすべて起こるまでは、この時代が過ぎ去ることは決してありません**」と言われていることも、この祭りとの関連性を示唆しているものとして挙げられます。

イエシュアは、仮庵の祭りの時期にお生まれになり、過ぎ越しの祭りの日に十字架にかかられました。また種なしパンの祭りから 50 日目、五旬節、七週の祭りの日に聖霊が弟子たちの上に降り、教会が誕生しました。ちなみに「神殿崩壊日」の翌日から数えて 50 日目が「ラッパの祭り」です。このように、神のご計画はイスラエルの祭り、ユダヤ人の暦と見事にリンクしているのです。いや正確には神のご計画の成就のタイミングに合わせてイスラエルの祭りが予め設定されているのです。「**いちじくの木から教訓を学びなさい**」とは、神のご計画の順序およびその時期について、イスラエルの暦、その季節の祭りの日から理解することができるということを教えておられるのだと考えられます。

3. 戸口

マルコの福音書【新改訳 2017】

13:29 同じように、これらのことが起こるのを見たら、あなたがたは、人の子が戸口まで近づいていることを知りなさい。

このように、「荒らす忌まわしいもの」「**偽キリストたち、偽預言者たち**」、獣とも呼ばれる反キリストとそれに従う者たちの、エルサレム神殿を背教へと陥れる**暴挙**、そしてイエシュアの空中再臨による教会の携挙は、二つの「終わりに近づくときのしるし」であり、まさに「**人の子が戸口まで近づいていること**」を示す兆し、前兆、サインなのです。では、実際の終わりとは、人の子が戸口から**家の中に入ってこられる出来事**とは、一体何でしょう。それはもちろんイエシュアの地上再臨であり、そのイエシュアによって神の敵であるサタン、獣とそれに従うすべての者たちが滅ぼされ、またそのイエシュアのもとに、生き残ったイスラエル、イエシュアをメシアとして信じる者へと回心した民がみな集められることです。しかしそのことについては、イエシュアはここでは触れておられません。なぜなら弟子たちの質問は「終わりに近づくときのしるしは、どのようなものですか（マルコ 13:4）」というものだったからです。このように、イエシュアは「**戸口**」の外「終わりに近づくときのしるし」と、「**戸口**」の中、実際の終わりの出来事とをここで明確に区別しておられるのです。

4. 父だけ

マルコの福音書【新改訳 2017】

13:30 まことに、あなたがたに言います。これらのことがすべて起こるまでは、この時代が過ぎ去ることは決してありません。

13:31 天地は消え去ります。しかし、わたしのことばは決して消え去ることがありません。

13:32 ただし、その日、その時がいつなのかは、だれも知りません。天の御使いたちも知りません。父だけが知っておられます。

「終わりに近づくときのしるし」について、イスラエルの季節、ユダヤ暦との関連性を述べてはいますが、その具体的な日時については「だれも知りません。天の御使いたちも知りません。父だけが知っておられます」と言われました。これは御子であるイエシュアにも知らない、分からないことがあるということではありません。決定権が父なる神にあるということです。神以外のものによって引き起こされたり、あるいはとどめられたりするものではないということです。私としては、一日でも一秒でも早く携拳されたいと願っていますが、私の願い通りではなく神の御心の時に、それは成就するのです。

5. すべての人

マルコの福音書【新改訳 2017】

13:33 気をつけて、目を覚ましていなさい。その時がいつなのか、あなたがたは知らないからです。

13:34 それはちょうど、旅に出る人のようです。家を離れるとき、しもべたちそれぞれに、仕事を割り当てて責任を持たせ、門番には目を覚ましているように命じます。

13:35 ですから、目を覚ましていなさい。家の主人がいつ帰って来るのか、夕方なのか、夜中なのか、鶏の鳴くころなのか、明け方なのか、分からないからです。

13:36 主人が突然帰って来て、あなたがたが眠っているのを見ることのないようにいなさい。

13:37 わたしがあなたがたに言っていることは、すべての人に言っているのです。目を覚ましていなさい。」

ここでイエシュアは「すべての人に…目を覚ましていなさい」と命じておられます。最初に述べたように、神のご命令は絶対です。この「終わりに近づくときのしるし」、獣の暴挙と教会の携拳は、地上の「すべての人」がそれを目撃することになります。昨今のテレビ放送の衛星中継、そしてインターネット通信の発達により、世界中どこにいても、まさに「すべての人」が同じもの、同じ出来事を見る、しかも同時に見ることができる状況、環境に、今やなりつつあります。ほんの数十年前ではあり得なかったことです。数百年前の人なら、今のこのような状況を想像もしていなかったことでしょう。これは人間の科学技術の進歩によるものではありません。イエシュアの、神のご命令、ご計画によるものです。「すべての人」が「終わりに近づくときのしるし」を見ることができるよう、神が人を通してそのようになされたのです。舞台はいよいよ整いつつあり、あとは役者の登場を待つばかりです。しかし、国際情勢のニュースを読みあさり、血眼になって反キリストを探すのは結構ですが、しるしはやがて必ず誰の目にも明らかになります。それを早めることも、またとどめることもできません。どうぞ落ち着いて、神を信じ、イエシュアを信じ、忍耐を持ってその日を待ちましょう。聖霊の助けがありますように。